

『バイセクシュアル』への差別から見えるもの

5/24(土)東京ウィメンズプラザ
5月のVIVID定例会

- 1: 「バイセクシュアル」とは何か。
- 2: レズビアン・ゲイのコミュニティ内におけるバイ嫌悪
- 3: バイバッシングの典型例として、伏見憲明さんの発言
- 4: 関修さんの文章の問題点
(知ってるつもりのあなたのためのセクシュアリティ入門 78ページ)
- 5: 「男女という制度」それ自体を問題化するために

.....
まず、クイズをしてみてください。

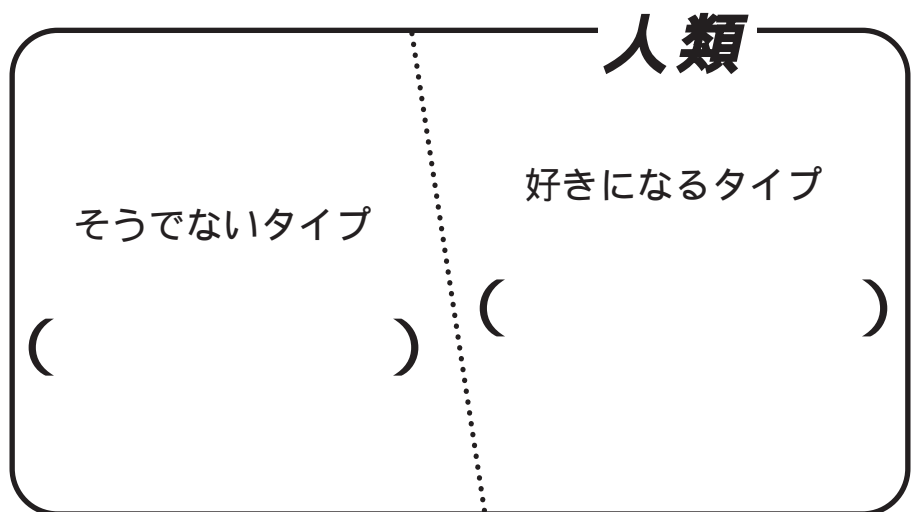
(クイズA)

恋愛やセックスという点で、どんな条件の人をあなたは好きになりますか？
あなた自身の基準/条件を、とりあえず気楽に3つ書いてみてください。

- 1)
- 2)
- 3)

(クイズB)

あなたが好きになるタイプの人とそうでないタイプの人とに
あえて人類を二つに分けるとしたら
どうなりますか？
図示してください。



1: 「バイセクシュアル」とは何か。

「バイ」は「2つの」という意味。

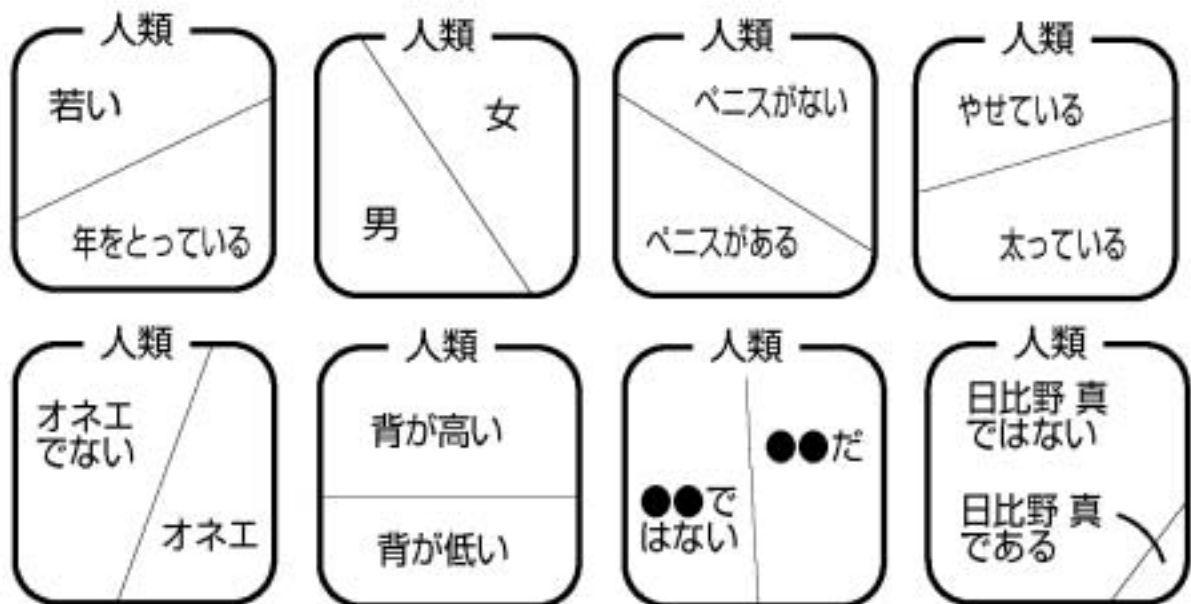
「バイセクシュアル」の大きな二類型

A: 自身の性別は一定で、好きになる相手の人が、同性の人の時もあるし、異性の人の時もある、という人。(複数の/2つのジェンダーの人を好きになる)

B: 好きになるのはある一つの性別の人で、自分の性別の方が時期によって変化するので、同性を好きな時も異性を好きな時もある、という人。(自分が複数の/2つのジェンダーを併せ持つ)

性的指向と性別指向との違い

- ・人を好きになる時の、第一の基準は何か。
- ・「性別」は、人を分類する際に、常に特権的な地位を持つべきものなのか。



人類の分け方の例 (但し安直かつ強引に2つに分けた場合)

「バイセクシュアル」という存在が明らかにし、問題提起していること

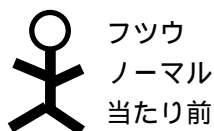
・「バイセクシュアル」は、「男女という制度」を問い直す視点の一つである「ホモフォビア」「性的指向」という鍵が問題提起している課題とは異なる、それとは別の課題を問題提起している。

・「人を好きになる時の、第一の基準は、性別である/性別であるべきである」という思いこみが今の社会の中に存在していることを「バイセクシュアル」は明らかにしている。

・「人の性自認は一定で、不変である」「人の性自認は『男女』のいずれかである」「非典型的な男女の存在は無視してよい」という思いこみが、今の社会の中に存在していることを「バイセクシュアル」は明らかにしている。

「性別二元論」

人は男か女かのいずれか、 体・心・服装など様々なレベルの「性別たち」はすべて一致している、 「性別」は他の事項よりも重要な、特権的な基準である



「バイセクシュアル」という言葉が内包する限界

- ・「バイセクシュアル」という言葉自体は、「性別は男女の二つであり、人に性別違和はなく、性別には他の事項に比べて特別な意味がある」と考える「性別二元論」の枠内の言葉。
- ・「人には、同性愛性と異性愛性とがグラデーションに共存している」というような発想は、確かに悪意なく「バイセクシュアル」を受け入れるための方便として使われてきた。しかし、この発想こそが、「性別こそが第一の基準」という考え方に基づいており、「バイセクシュアル」という存在を二義的なものだと考える根拠にもなっている。

バイセクシュアルが受ける差別

- ・ヘテロ社会においては、確かにホモフォビアの差別を受ける、とも言えなくはない。
 - ・しかし、それよりも、
- 「人を好きになる時や、人と人間関係を創る時には、相手がどの性別であるか、ということが一番大切な基準である」「人の性自認は一定である」という考え方(=「性別二元論」ひいては「男女という制度」)を、ヘテロ社会とレズビアン・ゲイのコミュニティーとの両方から押しつけられるところにある、とわたしは考えています。

2: レズビアン・ゲイのコミュニティ内におけるバイ嫌悪

「あなたは男が好きなの？、女が好きなの？、はっきりして！」

・「性別をことさらな基準にする」という価値観の中では、「バイセクシュアル」には居場所がなく、つねに「おまえは何者か」の釈明が求められ、二級市民として扱われる。「男が好きなのか、女が好きなのか、がはっきりしていること」が価値あることであり、はっきりしていないことが価値のないことであると見なされている。

・「性別をことさらな基準にする」という価値観を無前提に押しつけることは、不当な暴力である。また、押しつけることが「今現在」許されているという事実は、そこに力関係が既にあることを意味している。

・「性別を基準にする」ということは、「たくさんある切り口の一つ」という以上の権力を持ってはいけない。いまあちこちで「性別をことさらな基準にする」ことがさも当然のように振る舞われている現実には、不当な力関係が当然になっているということです。従って、変わらなくてはならないのは、今現在「性別をことさらな基準にする」ということがあたりまえに行われている場所の雰囲気と力関係であり、「性別をことさらな基準にする」ことに違和感を感じていない人の意識です。

「バイセクシュアルって本当はレズビアンやゲイなのに、プライドがなくてカムアウトできない人の事じゃないんですか？」

・そういう人もいるかもしれませんが。でもそういう人は、そもそも「バイセクシュアル」ではありません。これは「バイセクシュアル」の問題と言うよりもむしろ「レズビアン・ゲイ」の問題です。この問題は、「バイセクシュアル」について考える時の中心的問題ではありません。

・たくさんの「レズビアン・ゲイ」は、自身のプライドが十分でなかった時期に、「バイセクシュアル」を自称していた過去を持ちます。そういった人たちが、何の悪意もなく発するこのような言葉こそが、「世界」を「レズビアン・ゲイ」の都合で動かそうというたくらみです。これは、思春期に同性を好きになった経験を持つ異性愛者が、「大人になれば同性愛は直る」と発言することと同じ力関係に基づいており、かつ同じように力関係を作り出します。

・私はこのような質問に出会うと、「あなたは本当はゲイなんじゃないの？」などこの質問のようにうるさく聞かれることによって、相手の性別に関わりなく人を好きになる（または同性も異性も好きになる）という事実に自信をもてなくさせられている人がいるんじゃないか、そのことの方が心配です。

「なぜゲイバー・レズビアンバーやレズビアンやゲイのサークルに来てバイセクシュアルの話をわざわざするんですか？バイセクシュアルの集まりをつくれればいいじゃないですか。」

・「どうして俺の前でオカマの話なんかするんだ？」「別にこのホモの人を差別する気はないけどぼくの前ではそのへなへなしたしぐさはやめてくれないかなあ。気持ち悪いよ。」

そういうのはどっかそういう専門のところにいってやってよ」などといわれたことはありませんでしたか？そういわれたらどう思いますか？それと同じことです。

・歴史的にみても、これは話が逆です。「レズビアン・ゲイのコミュニティ」と現在では呼ばれている社会的空間は、実は歴史的には「ノーマルではない」「男女という制度からはずれた」人たちの空間でした。「バイセクシュアル」を排除して「レズビアン・ゲイだけの場所」を作りたいのであれば、そういうことをしたい人の方が立証責任を負います。

・問われるべきは、「なぜバイセクシュアルは対等に扱われていないのか」「なぜレズビアン・ゲイが社会的空間を私物化することが許されているのか」です。

「レズビアン・ゲイのコミュニティ」についての大きな誤解

1：歴史的にみても、「レズビアン・ゲイのコミュニティ」と現在では呼ばれている社会的空間は、実は歴史的には「ノーマルではない」「男女という制度からはずれた」人たちの空間でした。そこには、「レズビアン・ゲイ」「バイセクシュアル」「トランスジェンダー」「インターセックス」と呼ばれる人たちが、ごっちゃになって、存在していました。また、今でも、存在しています。

2：「ノーマルではない」「男女という制度からはずれた」人たちのうちで、特にゲイ男性は、もっとも社会的な力を付けてきました。その人たちが自己中心的なわがままを言い始め、「男女という制度からはずれた」人たちの空間を、「レズビアン・ゲイの空間」に作り替えようとしています。

3：性指向や性自認は、人生の中で、変わりうるのもです。何を持って「男性」「女性」「同性」「異性」というかということすら、自明ではないし、変わっていくものです。「本当の同性愛者」というものは存在しないし、同性愛者だけで集まろうとするのは、非現実的で不可能なことです。

4：バイセクシュアルの存在は、ゲイやレズビアンが社会に突きつけている主張や要求を自分たちのこととして振り返る契機になります。「私たち」はヘテロ社会の何を問題にしたいのか。大事なことは、関心も利害関係も異なる少数派とちゃんと時間を割いてコミュニケーションすること、その人たちのために場所を空けること、それをどれくらいちゃんとできるかということなのです。ゲイやレズビアンは、バイセクシュアルに対してはマジョリティー、権力を持っている側であることについての自覚が必要です。

3: バイパッシングの典型例として、伏見憲明さんの発言

さらにゲイライターとして活動していく中で、実際に私の周りに同性愛者以外の性的少数者の人たちが現われるようになっていった

- ・「同性愛者以外の性的少数者」と自身との関係について、基本的に何も分かっていないことを示す発言。
- ・「同性愛者以外の性的少数者」は、伏見さんが「ゲイライターとして活動していく」以前にも、伏見さんの周りにいたはずだし、いたと考えるべきです。
- ・カムアウトしない限りその人を「ノーマル」だと扱うやり方は、マジョリティーの流儀です。
- ・ここで明らかなのは、伏見さんは、「同性愛者」「バイセクシュアル」「トランスジェンダー」「インターセックス」などを、並列の関係にみているということ。
- ・しかし、トランスジェンダーが提起しているのは「性別違和のない人が私物化している社会のあり方」であり、トランスジェンダーと非トランスジェンダーとの関係は、マイノリティー/マジョリティーの関係です。
- ・インターセックスも、同様に、身体の性別の多様性の承認を求め、医療上の自己決定権の確立を求めています。それは、今の社会がそれらを認めていない社会であることを意味します。
- ・「バイセクシュアル」も、上でみたように、例えば「人を好きになる時の、第一の基準は、性別である/性別であるべきである」という間違った考え方を批判している存在。この点でも、同性愛者と「バイセクシュアル」とは、マジョリティー/マイノリティーの関係である。

今の私は、性的少数者どうしの関係は、必要なときに助け合えばいいが、そうでなければあえていっしょに行動する必要はない、と考えている。

マジョリティーとしての伏見さんの鈍感さという点から

- ・「性的少数者どうしの関係」を、対等で並列的な関係であると見なしているからこそ出てくるおめでたな発言。
- ・「異性愛者は、強制異性愛や同性関係嫌悪（ホモフォビア）の問題を考えなくてははいけない」「強制異性愛や同性関係嫌悪の社会は変えないとはいけない」

のと同様に、

「同性愛者や『バイセクシュアル』など性別違和の『ない』人は、自身の中にある意識『世の中性別違和のない人ばかり』『様々なレベルの性別は一致していて当然で、例外的な人は、そう認めてほしければカムアウトすべき』『性別違和のない人の都合で社会を作ってもよい』などといった意識を変えなくてははいけない」

「性別違和のない人の都合で動いている今の社会の力関係は、変えなくてはならない」

です。

・「必要なときに助け合えばいい」ような並列の関係ではありません。性別違和のない人は性別違和のある人に対してマジョリティーですし、「ことさら性別を第一の基準にしてもいい」と思っている人は、そうでない人に対してマジョリティーです。マジョリティーは、自己の持っている不当な特権について考え取り組む「必要があります」。

例えば、上記の 自体が、性別違和のない人のわがままで書かれていることに気がつきましたか？

・「同性愛者」「バイセクシュアル」といったり書いたりする時は、「性別違和のない」と断り書きをしない限り、「性別違和の有無を問わず、すべての『同性愛者』『バイセクシュアル』のことを意味してはなりません。なぜなら、言葉の定義がそうだからです。（性自認を根拠にして「同性」である人同士の愛情関係を同性愛と呼ぶ）

・しかしまるで、「同性愛者」と言った時、それは「性別違和のない同性愛者」だけを指しているように使われることがほとんどです。

・これも、性別違和の有無がマジョリティー/マイノリティーの関係、権力関係であることの証拠の一つです。

排除の論理

・「あえていっしょに行動する必要はない」というのは、事実関係をごまかすためのウソの宣伝です。現実の社会の中では、「あえて一緒に行動しない」という選択が行われるのではなく、「バイセクシュアルを排除する」「『バイセクシュアル』に対して『レズビアン・ゲイ』が優位な立場に立つ力関係をつくり強化する」という行為が行われます。

・「レズビアン・ゲイ」だけがいる場所は、過去にも、現在にも、存在しません。「レズビアン・ゲイ」を看板に掲げたすべての場所に、これまでも、今も、これからも、「バイセクシュアル」は必ずいます。その事実を知っている上で、伏見さんのような発言をすることは、その目的は明確です。「バイセクシュアル」に対する「レズビアン・ゲイ」の特権を強化し、作り出すこと。「バイセクシュアル」が、対等な権利を主張しないようにすること。これは、「バイセクシュアル」に対する攻撃であり、バイ嫌悪です。

・同意や合意は、「一緒に行動するため」に必要なものではありません。もし「バイセクシュアル」を排除したいのであれば、排除したい人が同意や合意形成のために根拠を示して動かなくてはならないし、「バイセクシュアル」当事者の同意と合意なくして「バイセクシュアル」が排除されるいわれはありません。

また、私自身の仕事の功罪に関るのかもしれないが、「クィア」「セクシュアル・マイノリティ」という括りを打ち出したことで、

・「セクシュアル・マイノリティ」という括りは、別に伏見さんの仕事とは関係ありません。

同性愛者と他の性的少数者がいっしょに行動することが「正しく」て、例えば、レズビアン＆ゲイだけでパレードをするのは他の性的少数者を「排除している」と言うような主張がネットワークの中で出てきたことも問題だった。

・ここまでにみたとおり、現に存在する社会的空間（それは、今では「レズビアン・ゲイのコミュニティ」と呼ばれることもある）を、レズビアン・ゲイが私物化しようとする間違っただ考え方。

・「バイセクシュアル」も、うるさいことをいわないのであれば、対等の権利を要求しないのであれば、「二級市民」としていさせてあげましょう、というアプローチ。

・本当に「レズビアン＆ゲイだけで」パレードをしたいと思っているのであれば、「バイセクシュアルの参加はお断りします」と明示するべきです。しかし、決してそうはしないのは、そんなことをしたら参加者が激減するし、「私は参加していいのかしら」と迷う人がたくさんいるからです。レズビアン・ゲイのコミュニティから「バイセクシュアル」を排除することは原理的に不可能なのです。

・現時点で「レズビアン＆ゲイだけでパレードをする」と主張することは、「レズビアン・ゲイ」の特権を保持したまま、「バイセクシュアル」を二級市民扱いしたまま、「レズビアン＆ゲイ」の都合に他の人をつきあわせようとする試みです。つまり、コミュニティ内での力関係を作り出し強化することを目的として、目の前にいる「バイセクシュアル」を黙らせることを目的として、「レズビアン＆ゲイだけでパレードをする」という主張がなされています。

・これは、基本的に、「人は同性か異性のいずれかを好きになるものだ」「バイセクシュアルは、本当はゲイやレズビアンだと名乗れない人のカモフラージュだ」という認識があるからこそ可能になる、開き直りです。無知による暴力、ね。

それぞれの主体を立てる自由を認めないような「セクシュアル・マイノリティ」という共同性の問題、少数派の立場にのみ正統性の根拠を置くような批判の仕方に対しては、

「週刊金曜日」

・「週刊金曜日」のオカマ論争においては、確かに伏見さんのいうとおり、「少数派の立場にのみ正統性の根拠を置くような批判の仕方」をしたすこたん企画の方々の意見は間違っているとわたしは思います。（実害も受けました！！）

・しかし、それと同列にならべることで、レズビアン・ゲイの（実は本当は「ゲイの」）特権を維持しようという間違っただ試みと、リベラルな主張が、混同されかねません。悪質な書き方です。

「それぞれの主体」

・「それぞれの主体を立てる自由」（自身のことを「である」と打ち出す自由、自分たちのことを「である」と打ち出す自由）それ自体を否定したことはありません。

・ただし、その主体の内容について、問いかけは行っていますが。(例：「ここがゲイの集まりだというのは本当?」「ここにゲイ以外はいないの?」「あなたが自分のことを『ゲイだ』と言うのはなぜ?」)

(「ゲイ」「レズビアン」という共同性が問題とされるのならば、「セクシュアル・マイノリティ」という共同性だって、同じロジックで立てられなくなってしまう!)

・なぜ?

・いかなる表象も、原理的に不十分なものです。わたしはそういったことを問題にしているわけではありません。「レズビアン&ゲイだけでパレードをする」ことによる弊害が実際にあるからこそ、問題にしているのです。

・パレードにおける「バイセクシュアル」排除問題は、第一義的には、共同性やアイデンティティーの話ではありません。「バイセクシュアル」の市民権(レズビアン・ゲイと対等であることの権利)の問題です。

・「レズビアン・ゲイ・パレード」に対する批判の核心は、「マイノリティ内のマジョリティ」の都合で事態が進むことへの異議申し立てです。

・「セクシュアルマイノリティ」という言葉も、それが問題をはらむ文脈では使うべきではありません。

相手の現実を知らないでは何かで組むことも、批判することもできないわけだから、私たちには自分たちにとっての他者を理解する努力も必要だろう

・言葉だけではなく、本当にそう思うのであれば、伏見さんにとって「他者」である「バイセクシュアル」のことを、労力を支払って、理解しようとしてほしいものです。

・以前「ゲイフロント関西」で「ぼこあぼこ12号 特集：『バイセクシュアル』である/ない、ということ」を編集した時に、伏見さんと日比野との対談の提案を編集委員会がしましたが、断られています。

「被差別者どうし共闘すべき」とか「弱者である彼らを助けましょう」といったスタンス

- ・「被差別者どうし共闘すべき」は、「被差別者」間の力関係を隠蔽する言い方。
- ・「弱者を助ける」という認識は傲慢。

4: 関修さんの文章の問題点

(知ってるつもりのあなたのためのセクシュアリティ入門 78ページ)

特に以下の二点。

詳細は時間があれば口頭で。

これはある意味でフェティシユな問題であって、同性/異性を前提としたオリエンテーションとは次元が異なっている

筆者に対する反論を期待する。しかし、その際筆者を納得させるような理路整然とした説明が必須だが。

5: 「男女という制度」それ自体を問題化するために

「男女という制度」を問い直す視座

- 1: 女性差別 (sexism)
- 2: 性役割の押しつけ (genderism)
- 3: 性役割の一つとしての同性関係嫌悪/ホモフォビア (homophobia)
- 4: 性別二元論

人は男か女かのいずれか

体・心・服装など様々なレベルの「性別たち」はすべて一致している

「性別」は他の事項よりも重要な、特権的な基準である

「男女という制度」の神話(案)

- 1: 人間は男女のいずれかである。
- 2: 男女の性別は外性器の形できまる。
- 3: 性別は生まれつきだから変更や選択はできない。
- 4: 外見の性別と体の性別と本人が自覚している性別は一致している。
- 5: 男と女は違うものだ。
- 6: 男女は対等ではない。
- 7: 男は男らしく、女は女らしくするべきだ。
- 8: 男は女を好きになり、女は男を好きになる。
- 9: 性別は他のことよりも特別重要な基準だ。

「男女という制度」という言葉は斉藤美奈子さん編集の「男女という制度」(岩波書店/2001年)からとっています。女性差別・男/女らしさの強制・同性関係嫌悪(ホモフォビア)・人を男女の二つに分ける事自体の問題点、の全てを同時に問題化するために、ジェンダーという言葉に換えて最近使用している言葉

セクシュアル・マイノリティ

91年、『プライベート・ゲイ・ライフ』(学陽書房)を発表した私のもとには読者からたくさんの手紙が寄せられた。そうした反響の中には、レズビアンや、トランスジェンダーの人たちのものも少なからず含まれていた。さらにゲイライターとして活動していく中で、実際に私の周りに同性愛者以外の性的少数者の人たちが現われるようになっていった。それまで自分のセクシュアリティの問題に精一杯だった私も、「同性愛」という言葉に反応して集まってきた、より周辺の「性」を生きる人々に関心を持たざるを得なくなり、『クィア・パラダイス』(翔泳社、1996)という対談集を企画した。トランスセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックスなどのことをもっと深く知りたかったのだ。

その後、そこに登場してくださったトランスセクシュアルの虎井まさ衛も、自著『女から男になったワタシ』(青弓社、1996)で自らの半生を語り、またインターセックスとして自らの居場所を求める橋本秀雄も、『インターセクシュアルの叫び』(かもがわ出版、1997)で性別二元制のありようを世に問うた。そうしたマイノリティの動きによって、性的少数者という枠の中で同性愛者は相対化され、「性」の多様性はより明確なものとしてイメージされるようになったと振り返る。とくに、埼玉医大で実施された「性転換手術」のインパクトは、男女の境界自体が連続的だという認識を静かに広めていったと思う。

当初私は、「変態」として同性愛同様、社会から排除されてきたトランスジェンダーなどに対して、同士の感覚を持って接していた。が、多くの出会いと真摯なコミュニケーションを通じ、共有する問題以上に、それぞれに異なる背景と、存在論理があることを痛感するに至った。それは否定的に言っているのではなく、より深く理解できるようになったということだ。

違いを知ることもお互いが付き合っていく上で大切なことだろう。ろくに相手を知らないくせに、すぐに「被差別者どうし共闘すべき」とか「弱者である彼らを助けましょう」といったスタンスに立てる人の方を、私は逆に信じられない。今の私は、性的少数者どうしの関係は、必要なときに助け合えばいいが、そうでなければあえていっしょに行動する必要はない、と考えている。

また、私自身の仕事の功罪に関するのかもしれないが、「クィア」「セクシュアル・マイノリティ」という括りを打ち出したことで、同性愛者と他の性的少数者がいっしょに行動することが「正しく」、例えば、レズビアン&ゲイだけでパレードをするのは他の性的少数者を「排除している」と言うような主張がネットワークの中で出てきたことも問題だった。あるいは、常に少数者は正しくて、多数者は間違っているといったスタンスで批判するような議論にも疑問を感じた。

それぞれの主体を立てる自由を認めないような「セクシュアル・マイノリティ」という共同性の問題、少数派の立場にのみ正統性の根拠を置くような批判の仕方に対しては、伏見憲明編『クィア・ジャパンvol.4 友達いますか?』(勁草書房、2001)、伏見憲明・野口勝三ほか『「オカマ」は差別か』(ポット出版、2002)で反論を展開しているので、参照してほしい(「ゲイ」「レズビアン」という共同性が問題とされるのならば、「セクシュアル・マイノリティ」という共同性だって、同じロジックで立てられなくなってしまう!)。

ともあれ、相手の現実を知らないでは何かで組むことも、批判することもできないわけだから、私たちには自分たちにとっての他者を理解する努力も必要だろう。もちろん、すべてに共感したり受け入れることもないのだが。

トランスジェンダーに関しては、当事者の立場からのものでは宮崎留美子『私はトランスジェンダー』(ねおらいふ、2000)がわかりやすい解説書となっている。自分を弱者の位置に置くばかりでなく、自身が矛盾した結婚生活を送っていることなどを誠実に内省している著者に、私は人間としての奥行きを感じた。ルポルタージュとしては、松尾寿子『トランスジェンダリズム』(世織書房、1997)が深い洞察を記していて、推薦できる。

知った気でいる
あなたのための

セクシュアリティ入門

関修
木谷麦子
[編]

夏目書房

76

Conclusion

いろいろなセクシュアリティ 総論

関係性の海へ

関修

77 第1章 いろいろなセクシュアリティ

次に(2)についてだが、まず有名なキンゼイレポートを紹介したいと思う。キンゼイによれば、全人口の45%は「バイセクシュアル」だという。ちなみにヘテロは50%、ホモは5%らしい。こうして、「バイ」はアドヴァンテージを握ることになる。というのも、「バイ」がヘテロに与すれば、95対5でヘテロは圧倒的多数数を獲得し、ホモを異常視することが可能となる。しかし、「バイ」がホモに荷担すれば、50対50となって、スタンダードが何かは混迷を期する。こうして本来なら、「バイ」こそ議論されてしかるべきなのに、言説はもとより、その名乗る人さえ珍しいのが現状だ。ここで明らかになるのが、そもそも「バイ」とは何なのかという素朴な疑問なのだ。横は実際、いろいろな定義を試みているがもうひとつはつきりしない。しかし、はつきりしないからこそ各人が細都合主義的に使える便利な概念なのではないか。だから逆に当事者と呼ばれた人たちが困惑をきたす。果たして、自分は本当に「バイ」なのかと。筆者自身は「バイ」は不要な概念とみなしている。まず通時的に恋愛の対象が異性に移動した場合、別に「バイ」を用いなくても「ヘテロ」から「ホモ」にな

78

った(あるいはその逆)といえ、それですんでしまう。実際当事者もこのケースの場合(本書の横のように)、あえて「バイ」と自分を認識するだろうか。では、共時的に男/女両方が好きな場合だけを「バイ」と定義すれば事足りるか。先日、戦略的に「バイ」を名乗って活動しているH(男性)に会った。彼は究極的に「バイ」と名乗る必要性を感じないという。というのは、彼の場合共時的に男/女両方いけるのだが、条件は「年下で肌が綺麗な子」なのだという。つまりもともと男か女かという問いはどうでもよいのだ。これはある意味でフティッシュな問題であって、同性/異性を前提としたオリエンテーションとは次元が異なっている。説明概念として「バイ」は便利な分、逆に切実な必要性を持たない。つまり、あえて「私」を「バイ」だと言わなければならないような必然性があるのか。「バイ」を必要とする方々からの筆者に対する反論を期待する。しかし、その際筆者を納得させるような理路整然とした説明が必須だが。②